



清前義經記

上

47
速 13
205/
1-9



門 13
番 2051

柳巷義理紀

為東江能 今振女師每慶

二之卷 目錄

一 傾城烏帽の親

名はゆゑに天神地徳兼至
ゆらゆらとじく女師賞
長刀の爪意乃掛指

西影の言阿乃法師

初野向の扉入

二 ちりあて女品の懐

あはれゆゑの寒更
足さぬの女品懐より
急と激と





ことよりんさかへ舞臺の上より花のころりと武蔵湯
 とらおひひとよめ磐瀬橋東ゆくらに面より出く
 如きうびんくはとみとらりあけ もろ徳有まの徳 そとく
 先八面塔のころりいどじ武蔵湯が交りてし我もく
 くらんの子細わのくくぶ東の玉井へ集落はひまふぬ
 一ごなほりののまふ際乃信よ十二に成りてあは
 者小ぶらとめく徳東の志強あまの今夜ふ
 けくの信よひ化生たのとサくらんとがア能たく
 言ふたれもくもまのいひひりくおくもまのふく
 徳東とまのいひひりくおくもまのふく ねも半あま
 母の作乃おのれゆわけをさすのころりてころりひと
 くりぬらあまのいひひりくおくもまのふく 川原さへたけ

ゆらに月の光とあめんと夕波の徳能面見転をゆ非
 そころりいひまぬ波もむられ夕影の花あまの徳能
 とまのいひひりくおくもまのふく 風とて海くくふは夜よ
 とまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく
 さんさる種とまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく
 とまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく
 天魔やんぬりたおりてとまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく
 我身あつとまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく
 くれた白浪のまより後る信板とまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく
 あせ半老とまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく
 一ひりくおくもまのいひひりくおくもまのふく とまのいひひりくおくもまのふく

とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて

先今日のお能へ是とて法を授けりしに
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて
とらむとて一物くわむとて一物ぬをけりぬとて

(二)

相違の松風をゆくの殺と皮捨よ麻の袖をさぶ
ろれまふまふをさぶろれまふまふをさぶ



俗世義經卷二

亂髪をまゝにひきとひりくせはわたり下のおんあやう
髪包をこぼしけしは茶せん髪をんさやうと形と縁海
をまゝに香もやれは魚のうしまりゆぐおくりせは
情よりぬらふなりとどごころんうのまをれ小まの乱
世なめしなれけいせいの元征大後の虎とあの海へうづく

三 侍夜乃すこと

うや今我常あつぬ抱ひひ屋敷は海り海りあ
まれ一人す。され人界の果へいりるお討あり奉と
時より海り。あ身の上おありひあせり。むつらあう
父の敵目にあつ法をたら養ひもあつひつりにと
君としりしと。誓も下人。いもあま。と。世に嫁とむ
とびぬ。お。息女。う。海。あ。こ。と。ん。は。お。の。よ。と。り。ひ

てゆきあうぬはかぬ元抱て海りてと。あうの。う。と。さ。
まなり。あ。あり。又。あ。う。と。と。と。と。は。な。分。胸。は。み。ら。く
あ。ま。た。あ。ね。と。お。の。思。を。中。く。お。是。う。海。り。あ。も
あ。は。な。な。は。た。ま。は。は。と。あ。て。の。と。と。り。程。ぬ。く。
あ。ま。り。あ。り。く。う。う。あ。た。う。と。い。身。は。あ。あ。な。と。と。
と。は。信。を。と。く。た。う。あ。ま。う。う。甘。ん。と。信。ひ。合。舞。の
ふ。ら。も。り。種。の。智。略。と。め。ら。じ。は。お。お。ご。ま。う。と。り。り
ほ。は。あ。め。し。キ。と。ん。の。ご。と。く。あ。う。海。り。と。た。う。う。あ。り
あ。ま。り。く。身。あ。り。ぞ。く。は。あ。の。た。と。ん。得。は。お。と。ひ。え
く。ふ。ま。の。と。と。一。人。三。別。よ。う。と。ん。と。分。別。と。さ。り。あ。り。が
や。く。息。女。と。と。り。う。う。う。海。起。信。を。ま。ま。く。あ。て。ら
め。た。る。海。り。ひ。海。と。と。と。と。と。り。う。う。う。海。と。直

びりてし 脇にハ氣をとをり。どがー火やそめは月
 わらぶとあつたにとのおはるとどうー益ういやり次はま
 にさどとどうぬ入まのよめをぬけく。此物後を
 そこくよ。暫孫ひせあひ々後まど今裁うそと
 おうけらにさうく。此月をあさめいどびそふぬけ
 出娘の身縁とさうー記法とりあーおんど乃
 尖ましく娘と解ぬ。是よりすまからんと身づく
 海のとらあよ。娘現後してあううめこのは志うこ
 ねらふうさうひさうらんあれせの波とるあせに船と
 かりあふわまこんあよあさ悔ーやびひ乃かむらぐ
 よにらまぐゆらあひひ日ふあな思ひうる魚ん後る
 山よのが海の島海れ海とらそれとあり捨めさやじ



山よのが海の島海れ海とらそれとあり捨めさやじ

と身とくこのよ今義とらしく身とあはれし。まわさく
そりあてふあわじよ細わのく縁とさうらひの六人の
發程とて次若は信りくらあ海世のまねやう
是よ書のとせしと一通と麻よなびりめあしとや
あんとん娘の面敷あわとあて候とて家二と
月がーのらひし方とみぬぬより形へ今より一書と
ふんさうく根ハ親この所り素と為よあせあや
是北中ととひゆんよあは次。是よと候うとととと
うり。うあどと慈海いつとあてと海分りやんご
つとと。娘ーやととらうふ門も。そ夜むそふと
通東洞院とて八分の海指わていしと夜あ
はた津とてゆうとて明えんよあさしと。後念のん世

小後びいものわうづえして案と家子久。赤馬と
二人ちあうらりはまゆよ候とてく。於藤へり。わ
いの山松飯屋。ゆせのふんぐゆこのととと。のりり
あてあめく。天とあわうのくあけ。慈のさむ花と
をとらとあめ物候。わとーとあいのくくも。とと
てく慈見より。ちうの三條の橋。法よとと。縁の若とあ
かうそ。河原あめく。のにはとて。あねとと。一掃
かあどと。存よあまらりえんせうれ。いんご。流
流しとあひが。つあ門さう。腰とや。あうの物。ま
け。業より。世とす。海とら。いんご。あまら。つと。わ。是
とらと。くれと。星の光よ。こらと。あまら。け。入。り
をらと。らと。あ。華のふ。げ。れた。と。女。た。ら。と。あ。と

おが海をう。おそうれ。こうもそら。遠く。よむ。おむせの。かづねと。
ら。う。み。り。こ。し。あ。め。ん。く。う。あ。ゆ。一。こ。今。義。收。も。あ。ら。ら。へ。
大。津。へ。あ。れ。つ。ま。に。ゆ。り。と。ん。く。ら。り。よ。れ。た。づ。ま。そ。か。ん。を。て。
も。た。ぬ。と。ま。う。れ。ぬ。ゆ。け。た。二。条。の。傷。に。ぬ。い。て。何。屋。見。女。
め。た。ら。る。勢。圓。の。あ。あ。一。じ。う。て。ま。は。よ。何。門。押。二。重。の。
か。く。と。傑。白。と。ぬ。の。あり。結。つ。ま。う。一。こ。ま。あ。ゆ。ゆ。さ。り。
を。ゆ。あ。り。神。を。あ。ん。字。及。ふ。責。負。如。る。こ。う。殺。と。さ。
こ。せ。く。く。じ。る。は。う。う。と。の。く。き。そ。ら。あ。め。の。あ。り。お。と。
た。後。も。あ。ど。と。の。あ。ひ。一。は。い。は。の。事。に。く。う。ま。ら。し。一。こ。
親。方。お。り。日。め。く。美。月。片。と。ま。ま。て。あ。め。ん。た。く。ま。と。う。
二。つ。の。概。く。さ。ゆ。り。ぬ。い。し。し。ん。と。は。あ。く。し。ゆ。き。の。あ。ど。き。
ゆ。に。し。ゆ。を。さ。し。後。津。の。流。分。た。ん。と。ま。う。う。う。う。う。う。う。う。

あ。は。げ。と。さ。ら。ら。く。つ。と。は。い。と。あ。あ。一。は。は。と。だ。と。女。二。人。よ。
ま。ご。ら。い。ぬ。一。こ。ぬ。ず。と。ま。う。ん。ま。う。た。と。後。の。ま。う。
さ。う。く。あ。ゆ。と。あ。ゆ。て。い。ち。あ。ゆ。に。あ。ゆ。の。あ。ら。ら。ら。
下。川。あ。ま。の。ま。ん。よ。あ。あ。あ。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
い。の。ま。は。が。ま。う。あ。う。あ。う。あ。ま。う。今。よ。二人。あ。と。さ。ま。じ。
と。ら。る。あ。う。あ。あ。あ。は。ら。し。ま。あ。ゆ。と。う。う。う。う。う。う。と。
は。ま。は。た。し。男。か。い。あ。い。の。ら。ひ。し。く。あ。あ。け。ら。ら。海。邊。く。
て。お。い。ち。作。が。ゆ。う。一。と。無。性。根。ま。何。あ。り。ま。あ。い。と。い。ふ。
お。あ。い。ち。の。勝。と。又。あ。う。て。お。は。た。し。ら。ら。ら。と。う。い。ふ。者。を。
六。十。六。十。ま。ま。い。り。く。お。た。の。水。香。ぬ。い。と。さ。か。う。あ。い。と。二。
度。と。え。ん。つ。め。思。ひ。集。ま。ぬ。一。あ。あ。と。い。う。う。あ。の。ま。ま。ん。
ま。あ。と。え。ん。の。事。人。せ。と。ま。じ。く。と。う。な。達。の。あ。め。た。あ。あ。

れ世にあらうかといひわくが馬一匹はあつておけと依
いさこの破子の麻に花のほのひらる首尾の髪を
今義とてとまのらち津へかともんはたそはあそ
夜とわし。人ぬえごめらまこくせんか。二つの馬
徳ととれ神のり門前よりゆつととまむらとら
東の方あたりの門も志せ者めくことおも馬方か
てするはあつらうととらる馬のまはへとわてど
くあつてはとびの女をく又掛つといふ時とたれも
り。なごも目とわけ花を何もいふのありとて
徳切あつていふと海にまぬと半にまじりまあひ
女と引くおぼく男中し半馬つとつはな分りた二
人の海にまぬとまのまらう鼻をけうと馬一匹のま

こられたがきつていふとさあめげきとてら成捨て
しとまぬたゆらあ海にうら馬盛入つともあつて
とらまぬ東のものとた合あつて川のけた花とさ
してあつらうと海にまぬとまのまらう鼻をけう

⑫ 主な馬は送つては

園とわやあし星は光とぬらりに通河の海をあら
未夜つととあつていふとまぬとまのまらう鼻を
高しは日本に地獄まにまぬとまのまらう鼻を
つとまぬとまのまらう鼻をけうとまのまらう鼻を
まぬとまのまらう鼻をけうとまのまらう鼻を
まぬとまのまらう鼻をけうとまのまらう鼻を
まぬとまのまらう鼻をけうとまのまらう鼻を
まぬとまのまらう鼻をけうとまのまらう鼻を
まぬとまのまらう鼻をけうとまのまらう鼻を

くらうあとのなすて山科十音寺れきあく明六の座
 奴茶屋の固物茶屋にさくさくあくびかある又茶屋をえ
 下女おつるせわけうておんや縁じつなんどさりとんら
 あい女めと今義からあまから目丸か年次してあまに
 つと井に馬はあご捨子水とけいひおまめでおまをいけりあ
 風情針屋の身世をゆめ干口あつ小女を扱むみとあ汁の
 かんぐん掛あう。今義やさうさうな海海あり足あり。
 身世あまをいりてあはあうそわ久来れ仙人をいそえ
 類よ朝日のうつとぬうけいふ今義何れもはけいんが
 あいのりとあてまもあの方とあはれ又あまといあ
 うれあまといまはたそそあまをいああああありあ
 ねあまとい。身世あはれけいさくさくせあて。二階うり目茶



ようと多つ夫よりひく一七日のえんぶく九而うは末
 息災延命といのつらに傳ゆれどおやま夜の長はふ
 今我こそ國の赤とじりゆけけを頼むそくふ頼む
 と下ひし一人後海なるさかひひもて情の厚なるほど
 とんが死男色の契ららうつるまどとらうぬ守人頼むたの
 舟今我より粟田は山科はじりりぶさおよまめあま馬乃
 道宗しひる尾づにわやと一平とそ入りまわんをよ
 じよ何く我のそ事又因者といつ夜海は宿をおひ海たの
 そよしふふあまをいあなままふ又忠おひれうを頼むとら
 ちる連とまのよまういおれまはるる葉の橋ははあま
 ましと幸と伝ひとらけとらうとひな夜たれなとて山科と
 赤のりねおを安ぬるあまをいしりね女やせしとすのそ

一はまあわはは海たの人もあまけはるはながくそ業は
 傷と名をとりけてうくまの長ぞとわらぶ家一里の由
 孫よた神々の神あまを安命長恩といのゆへ一と

此書のうらみ

因者

親うはくは伝可くも今我がふはありぬの伝説は
 のひといえり多は海たととらひまもて葉はとらひは
 ど道有ありといふとらうらに葉の八丁までありぬ
 一そとくせんそ文屋の内よ入てそれ病合とらふす
 及て宿屋一家とらひはして葉よおよとひめく頼む
 中くそ葉それ今我をらぬらうそをこそ頼むとら
 一此あつしとの身よあまうていひあまを頼むしよ
 あまのあまのい合とてく何とらま今我をらうとら

此書は只あるも... 片月は... 目も... 心も...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...
... 心も... 目も... 片月は... 只あるも...

御前義經紀卷二終

出
入

